

ライフステージごとの支援 学童期（小学校入学から高校卒業まで）

基本的な考え方

体が小さいうちに動作の中で中枢部（体幹・肩関節・股関節）の筋力増大を出来るだけ図り、体の成長とともに獲得できている機能の中でどのように体を動かせば、補装具を使用すれば、介助すれば、体に負担なく努力的な活動が少ないなかで動けるか、変形を予防できるか探っていきます。また、お子さんに関わる全ての人と必要に応じて連携をとっていきます。

小学校 1～3 年生

就学し、生活のリズムが整いやすく、モチベーションや集中力を高めていきやすい時期です。本人が「これやりたいな」「これ好き」と発信している事・物を使いながら中枢部の筋力、支持性の向上を目的とした運動課題を提供します。小さな力でも達成可能な運動課題を行うことで、移動を含め自分で出来ることを増やしていきます。また、積極的に立位等、抗重力姿勢を取り入れ骨密度を高め骨折予防を行います。環境に応じた移動手段を検討し、車椅子・座位保持装置・補装具等の導入を行い、変形・拘縮の（進行）予防も行います。

小学校 4～6 年生

第二性徴が始まり、著しい身長・体重の増加がみられます。女子は初経を迎え女性らしい体つきになります。それらの身体的変化に伴い、動作が緩慢になりやすく、活動性の低下が起これば変形が進行しやすい時期です。生活の幅を広げるために、移動や乗車の実用化をはかり自分で出来ることを増やしていきます。生活の中で抗重力位を含む多様な姿勢をとることや運動や活動を行う場面を設定していきます。姿勢や運動の方法（体操）について適切な指導も行います。また、補装具の定期的なチェックも行い、変形、拘縮の（進行）予防も行います。当センターにおいては、理学療法の回数が増える時期となります。

中学生

目標が『運動機能そのものを伸ばす』から『児生の日々の生活から実用的な機能を高める』ことへ移行する時期です。基本的には、小学校 4～6 年生と変わりません。学校生活において、授業数が増え内容も難しくなることから座っている時間が長くなるため、座位姿勢が崩れないようなアプローチや環境設定が大切になってきます。変形、拘縮の（進行）予防のために、体の使い方やホームエクササイズの指導も行います。

高校生

卒業後の生活を視野に入れたアプローチが必要になる時期です。卒業後の生活を考え、運動機能維持、動作の改善・向上に取り組むと共に、福祉用具の選定や作製を行います。卒業後の生活の中で変形、拘縮の（進行）予防のためのホームエクササイズ等を指導し、自分で行えるように練習をしていきます。